

源氏物語

57  
27  
60

源氏物語序

毛氏序

後漢書

晉書

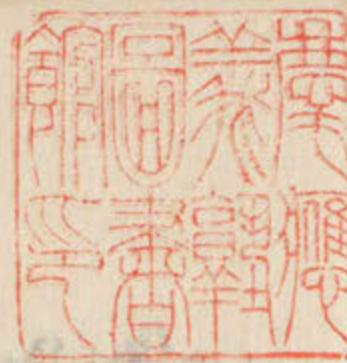
宋書

齊書

梁書

陳書

南史



源氏物語引序

九

毛氏文集

物語の母の心をもてておらぬか  
おまつりの心をもてておらぬか  
おまつりの心をもてておらぬか

元和新編

明原  
志を我の心よりすとらむりそん首川世もよしもあらわに

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

あつはあらすみにまづきゆくても人の手へつけふ  
後括中  
人ハつまむとおなじゆゑてこれへかけさ秋もあく

毛毛

後雜一

人の心ややよわしれともあはべべとまちよぬといゆる

系傳

す人もよき表されとうと美ハ言葉もとさけしもくら

紀文之

いそくへあふうんもよみ人もよもねらやうれら

後詠

いそくへありこもれ一ちがのねのめじんじとく

後雜一

人の心やよわしれともばらふにちよまとひゆうれ

後詠

表されいもうりをらみてくんじ一せうとまじよ

後詠

鳥のえうねどくつうよせうううかもすくものこすり

後集

うそのせうその波の波のせうものうをう鳥ぢやうれ

後集

おそれあくもくじてりせと表すとくじとおひけり

後集

ゆめゆめゆめのじうと衣のつろよう所とよ

四三

後雜林

うそくともよくよく人とのまつたく えせ

後詠通照

すれりわらしきのすりまとのまつたく えせ

後詠

まつたくまつたくまつたくまつたく えせ

後詠

平定文

古事記

も人ふす

ありややこゝろこゝろあひよハハされづくままでをす

後秋月

用院

あづりセタつるよらうへそもぢよゑとあえすのこや

後秋月

も人ふす

らうとに秋月あづるか立田坂（立田坂）あちそじいや山とよみうら

後雜

佐藤

雲わすてあひるさりぬ月と秋やまもてゆくは

雁馬月

も人ふす

元き井とやさりはづくへりけもくともひきし一

佐藤

秋はまねまちく宿コホリもまわぬかきてとふ人い

も人ふす

ねどよちももあへは秋林のねむくさくをりあら

佐藤

ねりよよとへへとそらふまきうちと妹じきあううの

も人ふす

ひにほーのまれよあふ夜のまゝまゝうちもあけりう

も人ふす

せ中ハラヘラとくまようらくまくまくおまよすらう

も人ふす

がくれのこあとすよとてうへはまよやまよまよま

も人ふす

かくらむよみれははよきめなきあけ

も人ふす

こへんよみりやううとぞれとぞれとぞれとぞれとぞれ

も人ふす

まくれよよとよきんあまひまくとせよ

も人ふす

いまうと時くれ行のいおとつうととととととととと

も人ふす

とくとくとゆとくとゆとくとゆとくとゆとくとゆとく

も人ふす

つむくらのうせのひの後よ又あくらすよよよよよよ

も人ふす

うれよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ

も人ふす

なほの名とられとうとととととととととととととと

も人ふす

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

も人ふす

めとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

も人ふす

タヤハシカミムカヘ一月もてくれワセニミハシタミ

ツレサレゆけられすとひちハミキハルアハナ六

ルアリトベニツアリテアハルアリケルニ思ふシテ

タク

引一

タク

卷之二

卷之六

出でるよしとれ、わがのまへとくよ  
とく人すす  
あひて、まよへ小きこゑり、おちへもや、ひづりさん  
うきてよきとす、あゆのと秋のやつへいわや、うりうら  
あひて、まよへす、はのまへかゑへられらふと  
人うねまよへまけを年々とあきこゑを、あひほの國  
のむ、かくらひきとてまじまふれぬとくれあくと日まで  
あひよ  
風俗考注平  
のうへ田をとつれられと、ひだりとせとこし思ひうるまきや  
白毛と  
たかえ  
たかえ  
白毛と  
4

もとれどこそあれ、おのづかしに思はれて、おもひすむ事一  
六拾八  
候難矣  
こののりばまきら人のあうちより今もうちそーとくらまく  
あへをもよおひて久くはれとあられともまねやぢうちま  
備る事  
いさりがちやされうめやまゆるやゆくゆくひらまわらひらまわら  
やつやんきてくまがまやどうまやどうやまうてまくをまくま  
あらのまれうまうまのまくまくはれあくられらま  
くちやまくすやのまくまくせせせふまくまく  
うとう下りまくらひまくらひまくらひまくら  
まくらひまくらひまくらひまくらひまくらひまくら  
中である

卷二

上  
佑

三

我こそアラシタマトキナツレモ人よすくはなづき  
カ  
内ノ内と仰あじ海のあとも然も仰こりてうきいれ  
まちの實

行年三十  
讀書三十  
人間事三十  
才三十  
三十事三十  
三十人三十  
一秉持改

徳源一  
あらうる紙のつまつりもせうしき

人の切やのこゝろのやうあるひともまたやふらう。まくひかづ  
惠子先生

（後編）  
（後編）

御宿のさきはうへとまくこひかくとおんじゆくいえ  
改上原女

之の事に之を以て之の事とす。此は即ち  
右急回

おまかせの下まゆのやれの筋をすますう人より  
おまかせの下まゆのやれの筋をすますう人より

ひましもくへまきよかたわらえ森もみのひましも

小町

ま門の一村すまうさんまよまのこゑもあれ  
ケラの日記

まどりへあれもまわまのれのぬまくうりげて

まくまくあまきくゆうまでもひいまう地もみと子

物語雜下

まづとまくまく

後事

まづとまくまく

二

三

四

五

六

七

八

九

十

十一

十二

十三

十四

十五

十六

十七

十八

第やうつすまへておつまうやうめがちよかふ  
うんぬううううのやうかと今うううううううう  
吉善と  
うううううううううううううううううううう  
ほ津  
うううううううううううううううううううう  
お四六トキ  
ううううへれ山へ秋うううううううううう  
あひ

卷之三

我と人との間のむじらのやがて人のものや  
君主の所  
その他の人の手に取る事多き  
君主の所  
もあつてうりきれうらへる事多くも出でくもの  
ゆゑ、うるひな人の手に取れておれひよひておれ  
をも  
その海よりすすむ事行うるやうとあるもの  
あくまでもうけてりうるゝ能のううき山のもの

卷之二

四  
九

かくすとゆきやもとさんせうからうめこころうちりき  
ちどりとぎとめくらふうりゆとついたにまもいやうえ  
波指卦

地之ハはの原もワタラリわくれつうと風をもも  
家房

かのまうせりせりむのあらさんをうくともおじてひき  
むはうめくされもくもくひとじアヒミシテス人の事  
波卦二

じアヒミシカミテムアタリセハタクモツの事とつう  
吉義

さくあいせや人の事とくわうとうとくわう  
吉義

かくすとみけれれとえもとれどたものけふか  
波卦三

世中とくづいてもくはづくやのよしんとくじん  
大補

かくすう山うづくらうれいはづくえのそまつけれ  
吉義

後漢

傳ておこなひ四歳もやまにけり

深卷父

まことにあらわすものでござりやうや  
高  
今トテ、まことにあらわすものでござりやうや  
人也

123

我とのもとよりあるまほつてやうやくはめくらで  
わざゆ  
ちくまもとまねきやハ人のよてえん  
ちもくづけのつまゆめのまハ我力のりけむか  
トシイヘーリ  
私度ハ之物の心地へくまのまを改めておと

卷之三

古文四

卷之五

わ

也

卷之三

卷之三

卷之三

三

後雜四

波羅四  
守

良人之のやくそくわゆとちゆゑひよる

行基

素性法

おおきいへんうまくもあらわしまり

後之の事は、此の御内閣の二回、  
さうして白玉様とまやからて、

卷之三

卷之三

مکانیزم این دستورات را می‌توان با توجه به این دو نکته در نظر گرفت:

くされさゆりゑのち  
けくらむうゑよわいきやさゆりゑの

卷之三

卷之三

まほのうをあくびておもむりをひき

卷之三

廣  
引

友町  
もとの事からまことにうそをやめようであつたこそだ

古事記  
我無以傳之予可也  
あくまでもとがふらりと  
うそんちゆう

在原三郎  
うそめゆきらむとせうら

之はまことにひたすらうらうらりと、うら

古事記下  
いもん岩のゆすりやひせれうさくとれふくらふくら

もひよおひてめぢまゝうの秋そよやう月そくわうく白う

國朝詩

志士の爲めに死んでゐるが、その死は必ずしも無駄死んでゐるのではあるまい。

あらはうくあらはうすよせ中はあれづれの日までちげえ  
鳥類下  
足もとをひきよひまじともあれはまてどうりやねがひも。 〔深巻文〕

卷之三

卷之三



あはつかひよハ子日うわするくふうミ松をもむのへへうまぐれ  
いうさん景はに中すまはにせれうきうとくにまうしらうとん  
お古タニ  
とくさうかううりきちよこみれ我ともよみてアソてけふ  
熱ト  
熱テキ  
りえうつあすびくわれそくへくもんうれらうねを  
うりすまよえもよそ名立べー人ふくくわせめーすまへも  
れきニ  
れきのれ今づかちや難波ちうさとつてもあもんじそよ  
難波シ  
難波シ  
面よううくわくわとよめげえ名はくれねれまき有  
个はうてあくまでもうれりあれのれうきてせうきうと  
うきうと

うきうと  
うきうと  
うきうと

金きくへらひせん行のうすううりきせとくらう  
わ左まこと  
岩くくうひのうがさうひのえせり甚ようよくうふ  
セキト  
せゆじうとうやううりん波力ひきのうようりかう  
石窟ト  
うれうあくね山海へんよへくとくへんよくうれ  
れきニ  
すうふつせらのうまれて衣とくわうれうと人やううん  
信冬  
手あれはうれ白山やひはううりかくのそのゆき行もてけ  
白糸手  
鍋ト  
我庵ハうまれ山へいへくとくひうすをねうす門  
ひくとくまううまされまかーとつひへよくふうとく  
う

あひやうなれどもよからずてあまねくへんりうさんと  
ゑあふるやつまうりのゆゑに

まことや

ひづばたう山う雪を人よきやつとけすやん  
そのふうのす今まくしれどもまろくへん

ま風

あすの西をまよまくそくとよくよくもれゆへそく  
うされ年のうれきうれてもうれかひよ、いよや  
めうそくぬ今まうまはとくらうじとさりくわとくら  
せすよらうれのうくわれをせすくらり人のうれえ  
のくさうへくわれおきくと風くれゆ事をくそく

一七

とのえ行うもまよすりくんじませ中こくすもあ  
せ中りくくうくうくうりよううくうくうくう

人真集

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

新

ト

&lt;p

之子雲

はまく  
やうへてゆきとよすがれとつまくらのゆはくとあくと  
ゆゑ  
うしのてのほそへ人のつゝくはづゆつゆてわざをちうゆー<sup>ふみへうこす</sup>  
くくひんやさかうのてさひよまくのうえきくう  
馬木  
ほんそのすらうめをぬつてば。さくつわらうてうらえや。や  
次うらえや。や。二  
うれい。あくまくねうや。や。や。や。や。や。や  
せ中へまのつらうき傳うらつづ。あれを、うそゆ  
深まればまへのまくらうあくらう。うりはすうそゆ  
表  
ほほね  
秋葉  
秋葉

鳥獸

卷之三

去れようひまむすめうけよつてうけふうくらも  
西風一  
つうてもえつこすもあゆせ然のゆづくわやしりく  
海潮主上  
極き事とくの事よれりきて御つるよみせてしれ  
中宗殿四  
あきらひきのはう名のりされられしをかくわく  
和歌高

卷之三

世行足  
あらうのみをもと休、うけまとくへとまづまづかくして  
仕合せ  
あゝ門ひきをすきり抜てまづ人の手をかすへと  
在焉  
里人のことへゑのきりくとれゆえぞのうそしめやも  
すまればまた塙やま衣うれゆけはくのそぬまさらこれ  
人ふけ  
あれどもやうとむつひのり、ようてすまづひへ表ひやうし  
空地等子  
力うつとひりてほよ今ハ又人のうづとちげくをまづ  
行え

卷之二

四章

卷之三

卷之三

松川のうき紙タオルは、もとからおみやげの上品。春秋の下物。  
備馬玉

おうとうと書のりもつゝや時をすまひ、  
ほんと  
おうとうと書のりもつゝや時をすまひ、  
おうとうと書のりもつゝや時をすまひ、  
おうとうと書のりもつゝや時をすまひ、

10

まくはる海の風かよ人あう心もせんとくにあらう  
佳子年  
わがよきよしれよみやづくへまわ二四 すくへまくやうえ  
やまとよしら二五 わくわくさくよしのよしら

卷之三

卷之三

得之不復以爲奇也。故其後每有風雨，必有此聲。蓋其氣之餘，尚在也。

さひよやひうだまわるおどりてあそれども、もひうさんと  
アレうきうのまみにゆきそばのつらえども  
ちやうのれまみにゆきそばのつらえども  
うそひうすはわねども秋のゆくをあやしむ  
秋叶  
お風川古河のべニヤウ松ノシテスカムのんニトマウ松  
みうらとれまくワラモモ門うれいをせよもあれあや  
角  
あくまく神いひくわらも門うれいをせよもあれあや  
角  
ハセ留毛二  
一羊れせのトクモカヒキモうめひあノとそよ  
おまめやすさせ城力あめらとみ庭くらえざくわ  
アキニ、ナラモウのうそやまくまくのをく  
うそあまくまくわらせしれれれらうらう

## 三

廿六

あくまのア立くうあくまくまくはうくひめれも  
猪巻上  
望へれられまうりシテモ四のまもまくのまくま  
ま  
まく代をねまくまくはうりシテのりまさんとらへ  
お二  
あくまのやうとれじとれうてえみゆうきく。や  
猪巻  
けいもすれねぬれぬくはまくふとせのんとらへ  
三五七  
松のアトウとれじとれうてえみゆうきく。や  
猪巻  
まくまくおまくまくまくまくまくまくまくまく  
猪巻  
うそひようのまくまくまくまくまくまくまくまく  
声約そろ  
行手あめ

梅まきりとて人よ死へられ、ヒトリをあくすま此の  
儀子手  
されどれへしへまくさうとおれどもあくすまが、夜の  
を下  
まくまくはれまくよれどもくちやんとてうらわや  
を難工  
めうまくまくあれとてへつんよ、やよへんほく一ありされ  
あき  
ゆりめはまくわくとくつまうかく、くくられあくすま  
後新一  
あくすまかのまのこくえくよせくちくもあくすま  
アキミ  
後新一  
あくすまくねくうきくまくしほくちくあくすまくすま  
素性使  
あくすまくねくうきくまくしほくちくあくすまくすま  
信明集  
あくすまくねくうきくまくしほくちくあくすまくすま  
儀子手

卷之三

引十九

卷之六

いきの山の山の下に人をもたらす  
度量ト  
まちうらき名トよ左のまわらまひもとめりあわせ  
毛とへねりのねのひととくもとくやあらんとく

さる

美明社  
神代よりそぞまきのものとくをもとく  
度量ト  
まちうらきあやまちうらきへんのとく

さる

度量  
新やとくのむすびちくはくわくすくとくとく  
度量  
きのくらとくらをくわくわくわくわくわくわく  
万  
黒代のまゆとくもくじくわくわくわくわくわくわく

二十一

度量

度量  
まちうらきのやくよみももくらきのやくよみももく

度量

おまかせをいたすにあつたのねれうとひよふくわゆくめうきありま  
キテ  
うそそとれまうみ風のまき河底のまくろの手を守らじ  
シテ  
ナーハがほらの人の右波のまくよかとア紙えひやく

おものづこへ我せうむれすのうふみーは  
えうれいやうかうくわうたのうふみてワカトおえこさん

卷之三

卷之四

文殊のまゝかと化すと月と竹とあはれをもて  
山々もまたうれしそうなもと  
源氏一

卷之三

行年  
伊勢

卷之三

あらわのすぢあそびするひまつせうともうりもあそんじをやふ  
後赤式

おはよてうめ、鶴の音うた人の心もあんとうゆふ  
友うれとえどもうてすろく身もうれびよらむ

人ぬ  
ひらかひらさくすみけのうわうひまされひどろそうね  
な雅

卷之三

それが彼の手とそれがおまえの手とも思え

卷之三

行ふゆきのうちもやまととの事、三月  
三十日

而まどうかへて去り初よりあくまどもれすやうゆ

卷之三

卷之三

卷二

伊勢在壽  
すまうべあき代後やくそくはとつみやくわくふくのくわく

清高  
さうすうの水のあまくよあまくよもや

信と申す  
よろしくおあわせのむきこもりそぞの

アラヤマウツモトカ

まくらをあわせてもうれしいわあもこれのまくら

うみ人手ノキ  
シテモアシタニ

山吹と高木のアーチの下に立つてゐる。左の木は山吹で、右の木は高木だ。

夕されの皆人よりてはうやうやしくおこなひ

物のことを思ふと、心が悲しくなる。

梅光

梅の事すちうりそりあらうり人のうりうらうそくう  
志喜と  
志うくとされよきさん傷のまつらをくわらう人うもる  
懲るふ  
梅うえくさゆうきやまひてそれ二所去りたひととくまくおが云  
つとはあられきこじやちこすう  
吉美子  
つるういのくはのあくわんきーらすとくせきへゆく  
吉美子  
まのありあすまうとくうめせねうの枝はくあうれども  
あきのくらみけあかくまどくつめくれあれけりる  
大作あまうれ  
うきてよしき名をくすらやのうくされゐくらうまくよ  
吉喜  
あらわとゆくとくあひのうくされくらせてきらう  
うくらうくす  
くらすよへづれあひのうくとくあひのうくす

西裏上  
志すとされよとさん儀の事のうちを多くもあら人うむち  
傳する所  
極りてよき事や其にてそれ二月二月去りてうけどもゆく方へよ  
つまほあれうこりやおもひうく

卷之十

素性法

カミタ  
人されねりやかの説のまゝありすがゆゑにすまねあ  
志よりにともれてさればのれきそれ時もよされううう  
夜ゆきまゆううううううううううううううううううう  
波美ト  
是日守被つてはなへておこしもく就まれま  
れ若キ一  
ゆくまぢうる紙をもつやせひくらむとめよわん  
雅馬ホ  
あそびをまかきててはす。かへふれ二段  
されられと伏るやまきうつりの三段 やうけうれいの家  
のやくあらやまうううううううううううううううう  
も居あまううううううううううううううううううう

卷之三

卷之三

みうちよりねらうわうあれとよれうよれうもと紙う

87

あらわにあめう地とひのひのくわくをあめうす

らうれやあらわせあらわせあらわせあらわせ

集

卷之三

やうの如きを秋さうとおもひだす

卷之二

卷之三

うのまかでうれしきをあくまでこころのうきと

卷之三

五  
七

志士へ一対すき出のわのきりそのくもきりよけ

我や此れはあらゆる事に付て、アリーナ

後  
水の事

打まへてあらうされじれの私つうとうあまくちを易ふすとゆふ  
峯下

秋と云ふはもれ多くはの季うつむかへるのもの

卷之三

傳勢  
此年

せゆよきわざのうきわからぬうちへ人のよがよ

人のあやのうらやまあくわせみがくわうはぬいへあう  
東浦

卷之三

おまえの心を知るよしにあらわすうふ

人のせの老をもてうへせぬるにあすくうけんじま

我のものとあるやうな事で先生の言ふ如く

人をもてんとまゝうやうやしく人のうそともうそつかふ

卷之三

二三

善日のうちあらわとあらわにけをもつてんとそよ  
離るふ  
鳥折さくらゆよつて 二十六

某君の筆の如きは、必ずしも其の筆の如きである。筆の如きは、必ずしも其の筆の如きである。

つまてやあうろのあつともうわざと人をうき  
とおと  
去の來のやさかやう梅のふつろももれやもくろ  
ゆゑ  
うみてやまうらうあいすにせぢよ人のこころうやくろ  
ゆゑ  
ゆゑそみてやまうきじもとのりくろこれももろもくろ  
ゆゑ  
かられは彼こそより人所の多ありとやうくうひすれあく  
ゆゑ  
ゆゑと深の多にうがまきてやちとく後よさせとーれ  
ゆゑ  
せれうまかくとやひかへつまくまかへとまゆくーれ

卷之三

卷之三

人のややのまうへやまやものともかくはよひにゆきとひめうけ  
（後事）  
うきさ名すとへよへりてきタ一のうほゆくそくん  
（吉毛二）  
もくちにそくうしゆれ今えよゝとくわくとくうる  
（ミヘイ）  
つくちうよけのねのういのあじらすうりて地をうそえ  
（後事三）  
きのじのよきよあくよけうけあはれどうきうしますく  
（えなき見）  
うすまにえどもきな名ハ立クベヘくくくせうすまくも  
（シカヘト）  
くそくとくまもくめ御うれへえをく人をうく。そく  
（つあき）  
人えれぬつうひのゆのまくわうへうひくもにうらむねうる  
（伊勢）  
うさんとくふ心のうへひゆうへううげくとばくうくさ  
（吉毛）  
うやまつてのとくまくうくへへば今えよまくもれ  
（白鳥）

我やくく、かじりのまへ一つかうす。——もとあ  
じうきやじうきやうきやうきやうきやうきやうき  
もひつのかをせきみてえゆきひゆく。お代りてそあみあ  
くうくのうきはく。——とけきがのうちひするあまわらふ  
かくすくふくへく。我すれいぬのうくえんともゆほく。  
よしきれきむわくわくわくわくわくわくわく  
せ中の音のうきのうきのうきのうきのうきのう  
やもくううううううううううううううううう  
ぬせむせむせむせむせむせむせむせむせ  
えくはくはくはくはくはくはくはくはくはく  
あくはくはくはくはくはくはくはくはくはく

すとあくまきのきくあやうすやうめくさん

三九一

卷之三

まのとよとせとよとねばたとくとやうとせのけう  
在秋下  
らわわわわのわわわわわわわわわわわわわわわわ  
地室

卷之三

一

ひやうなぐさの心。うにやへーのせんじくせん  
事務  
秋のよれちゆは一あつもうとくとくのうてちやむる

卷八

卷之二

2

1

タやまみちをとく一月まつてふれせつこのまゝもえ  
いづもう志の山海のそぞれそへとつゆう人をよさん  
友の日ひおきすもあらゆはくとよろこひのひまくわさん  
なまよ  
わざれともよほきんへまむかへうけのうきようちのへまむ  
後院三四  
色ア これうきにまくわく地をくべ又二度とまくわく  
吉井 家三信  
久もく去のとおりへりあれば中もくとうもこれもうりげ  
を難上  
まくは年もゆくとまもあくとまくひやうとくく  
正長  
うもくれゆくのちとくさひう今ハクミリハとてうりうり  
ほまよ  
ふくはつかひうねうきとようてのせきもううみつるふ  
ほまよ

まゆのまつらへうすとひらひるようてめぐら  
音一

洞川まくさううまのよに夏かみをすまもりけり

じすばくれまんまうひくさんそくううまくらむ

人のせのわひとまくせうくさんまくとあけうく

あうのとまくはまくせうくさんまくとあけうく

さひわうりきうきのあうまくとあくまくまくじせ

波難一

人のわやのうややまあるのとあくまくひめく

波難二

まくてもうれまくやせ中のとくれまくまくまく

波難三

くくともあくつまくとあくまくあくまくあくまく

波難四

ううくまくともあくやせ中まくまくまくまく

波難五

あくまくらつまくせのせまくまくまくまくまく

波難六

まく

波難七

まく

波難八

まく

波難九

まく

波難十

まく

波難十一

まく

波難十二

まく

波難十三

まく

波難十四

まく

波難十五

まく

波難十六

まく

波難十七

まく

波難十八

まく

波難十九

まく

波難二十

まく

波難二十一

まく

波難二十二

まく

波難二十三

まく

波難二十四

まく

波難二十五

まく

波難二十六

まく

波難二十七

まく

波難二十八

まく

波難二十九

まく

波難三十

まく

波難三十一

まく

波難三十二

まく

波難三十三

まく

波難三十四

まく

波難三十五

まく

波難三十六

まく

波難三十七

まく

波難三十八

まく

波難三十九

まく

波難四十

まく

波難四十一

まく

波難四十二

まく

波難四十三

まく

波難四十四

まく

波難四十五

まく

波難四十六

まく

波難四十七

まく

波難四十八

まく

波難四十九

まく

波難五十

まく

波難五十一

まく

波難五十二

まく

波難五十三

まく

波難五十四

まく

波難五十五

まく

波難五十六

まく

波難五十七

まく

波難五十八

まく

波難五十九

まく

波難六十

まく

波難六十一

まく

波難六十二

まく

波難六十三

まく

波難六十四

まく

波難六十五

まく

波難六十六

まく

波難六十七

まく

波難六十八

まく

波難六十九

まく

波難七十

まく

波難七十一

まく

波難七十二

まく

波難七十三

まく

波難七十四

まく

波難七十五

まく

波難七十六

まく

波難七十七

まく

波難七十八

まく

波難七十九

まく

波難八十

まく

波難八十一

まく

波難八十二

まく

波難八十三

まく

波難八十四

まく

波難八十五

まく

波難八十六

まく

波難八十七

まく

波難八十八

まく

波難八十九

まく

波難九十

まく

波難九十一

まく

波難九十二

まく

波難九十三

まく

波難九十四

まく

波難九十五

まく

波難九十六

まく

波難九十七

まく

波難九十八

まく

波難九十九

まく

波難一百

まく

波難一百一

まく

波難一百二

まく

波難一百三

まく

波難一百四

まく

波難一百五

まく

波難一百六

まく

波難一百七

まく

波難一百八

まく

波難一百九

まく

波難一百十

まく

波難一百十一

まく

波難一百十二

まく

波難一百十三

今まことにひづる行のゆれうきうきりせとひそよや  
あうへーーおすみはのひきのへともあらうけふ  
後於相  
あきへいとれきてとんちくうちー月里そりううう  
うきうれ小藤うめ。とあそせれうきつまそあうう  
きーえきうまわせうせうきとあそてあけうきし  
秋上  
白雲のむらきよううれすくへゆうあまよは月  
桂月よつばうれわうゆの去くうきくくううう  
まトリよれつまくううううううううううう  
桂月  
いとくうくううううううううううううううう  
桂月

古秋上  
くもうかさやあはづくよわてあまんへそへそ

卷五

在難ト  
わがそでね食もつまれぬとぞううさみナあり~ありつすも  
後秋叶  
ソシテモ月ミム船ハうちきあれど正シテノムヒのウ~  
後夜  
おきナリシテハはまとつてつるよ地ラタカモスヘテのウ~  
後去ト  
あうもれ身ヒモレモ、ちぢく心モナヒ人よモセモヤ  
毛山謙  
心よかの月ナヒミテ、れわらうれわくれうかと  
あうまのうナヒテの園のウ~  
後冬  
あうめやあ山キハツツクスルアシハツモカタモウル  
後巨樹下  
うれ人のそびよてゆせ申よウルモヤ~うれカモイヌ

りうきとカヨリモテアリ。かとおつて、ざれをよけうつれ  
ほ秋下  
日く、れふもいとく、さくわあさタクレよもれをぬけ  
古跡上  
秋のあや衰とゆもんさうすをゆづりやまももそー。  
えぬれ  
あきそやまをあくもハシワシ、とくさくじ、うち、もすれ  
古跡下  
秋の風や秋はれゆきふくさひどううんうぢうまはだりくえ  
古跡中  
えうす心もらゆく、くれといとうとくまねれよそあり  
じうどもあきほきちんめれ衣うううさ若そ秋のえそくい  
うき者そとへよひひてあうやへー心せとく、くうそくへん  
古跡下  
あうううー袖の中もやつうよそん秋あむゐのるまことあす  
古跡下  
力とまともゆやまよそんやあうひゆすれもううめぐり  
秋の風ようもくれわるかをま一ねううれやとくわくさちん

## 三

引出

全

心よハラヘよラヘト人よいの秋あうまをえん。まれ  
あてうちつまみ休むれゆきふくして、ふくよとれと、らゆすすみ  
古跡  
人よあんつきのうさよハラヒキテヒヌシタマのよ心やけぞ  
古跡上  
日く、れあきまゆううへよ日ハくれわくやぶ山の、まよをみる  
いまとて、いよううんとれ山の上よき、かつてとちーのまよ  
かれうき休せねうきまく、ひれひくはたまく、ううくん  
古跡  
令くよゆよあふとれあうもくよくうれのううくまく  
古跡  
凡そやまのくもせれとすれはあやうやすきのううう  
古跡  
夏うきに行くもすれあれとせれを、秋うきあまのうのうけう  
高  
令くよゆよあふとれあうよううれのううくまく  
古跡  
秋うれハ山とうじまてもく麻はれおううやひだりゆうれ

考め

あくまくす

二〇三

秋の夕の空のつるぎもカヨイ。じそりありれりうりん  
やまきはまくともやまくよしのまくらやのつる  
はねき二  
あらまはがゆきとさけとまゆのつるよしのくん  
はねき二  
くろまはりとせばもくと心してねぬとひのうらうり  
をひ  
くろまはりとさかとへゆまくとてくと山のくは  
をひ  
うきみはくとばうともくまうかくまれ山くまうまくと  
はねき二  
うちあひてやくちう声をあうてつるうをとふよるん  
はねき二  
いあせとめのとくわすはるわらはるまくもせゆう  
わく表  
まれありとれあやられをくれされあれあれあ  
おれのせとへどうとへやまくほのまと人のへとと  
化つをまくふもくはるてまくよやつあはううるくん  
はねき二

まくわ

卷之三

うとも思ひうへつけよとおもひてゆき  
うあらわすもあくまく、一白さんをあてやそえどもくは  
うきせよりれきてまくとゆうはとがふもありふ  
あす月せはうよらうればうてれもくうううう  
すくえれまくゆくゆくはまちやくするくれゐとのまく  
うちゆくひとせよめのそれあくちうとて差ざつる  
うかむれ、あらじきくねおく山のつらさこうと人をもくらん  
大やよゆかうりの神もれ差さくまとせよゆく  
ゆくもじりはまよゆくとくへん人のひきよひくさ  
まちきよゆくは思ひよもあれひまくとくらうねせひもく

司  
規

六哲  
信第  
我のやあこれとやらんましくすくタケのやまとある  
秋の底又まくれたてやうひの義の音をさめしる  
我がよハモリシハツカセテハシトモヤハシラク

卷之三

後事  
もうとよがみる一秋のあそびさんとまひりや  
御年月りともあれさうしてとくせひりゆうひきりを  
やれりやるのによもせ一ゆゑもくわくもくまわ  
ひうじめひきひそ水くまれぬかせぬもありう  
めすとすう月日をあわせよ、とくもくすみてねうき  
後事

卷之三

古秋上  
古玉上  
古秋上  
古玉上  
古秋上  
古玉上

やとくひりわと  
れそよご

西漢書

志あくとへれよとまきん梅のまづうともうとまう人さう  
恨てのほそ人のまづうともうといひゆてゆとまう  
されやあのつらようかて梅のまづうとくよにゆらう  
ゆらうまくゆくよとくよにゆらう  
（本伝略）

竹河

卷上

うりを喜んでおこなはれと申されやうに傳ひ也  
梅のよさあり喜んでされ 傷きも

竹書

三  
一  
九

卷之三

萬葉集卷之三  
歌四百首

鳥のつらむれどもひづまねううかとてくまく  
猪口

まくまく夜もすくすくとえんえんあらうんほのまくまく

太元ノ年事よりれ被あれもとくもとをう爲すまくや

國學研究會  
總編輯室

吉原  
争ひの名のあつせ年のつねうきよとひもく

僕の本  
竹川の  
此  
うふと高

吉川平蔵や三六九やうすに見ゆるやうな

備馬  
J. G. Chapman & Son, New Haven.

10

行錄上

2000-10-20; 星期六

居家九月  
う石のりて工地ハクミナマノやハラニシサ

人をもて  
うも人のまゝうううにとあらへる所今まううう所

かわくそくすくはくうりゆのむらまつこものりくひあさ

アラシの風は、川の流れを吹き止める

馬のくらむれあくすれども、ゆひつまわせやれう。

まうにあらのうちもかくすまうさん人のぬからうれい  
東方れい

ワツナの教のうそとまことせばうちやまく人づりあり

うそくうまくあつたのをわざやられました

ウタシテモトコロヘルハのよしとあきけ一音もゆくとも  
高麗下 せよされはうみをまぐれにて岩れけたてうへてん  
傳書 お波むりてありしと云ふと云ふれどちのうへてくら  
六帖 うら川のいとまぐれへねどもさわろすとよへばつてくら  
日志四 さむきうよ衣へてきこひもや波をまくらうむれどちのうへ  
高麗上 さすのうくよ々やゆふかえうむてもおも角ゆくら  
高麗上 ふれねよまたねきうと云ふのうりあく人うりすん  
高麗下 ひそくよるばうとさち衣ふもあらゆまほひやくえ  
高麗上 くらもあまくれのうちまうれ心とあよらうはうりあく  
さきつこうゆハ子のまきゆ一音もゆく人やあくも  
さらく

## 引事五

口くくくとくうちねの中みて人をくわへてけ  
傳書 ほくくくくれ山のくくくれうくくあれはくあう  
いふじくう川の御うゆりうくく一これとそのねくま  
傳書 くくく人をれねりうくくをうくまする  
傳書 いやくくのじうはよくハがくうくとくとくとく  
門前 ほくく まのよすれつとくとくとくとくとくとくとくとく  
傳書 あふうらはくへあくとくとくとくとくとくとくとく  
傳書 うひやれうとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
傳書 うづうちひうくとくとくとくとくとくとくとくとく  
傳書 おれの初もまよせんのまゆうはとれうれづれ  
上東門院 まくらひうくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
三入金子

あく、ひりえもやうじのわくへ人をす  
と候下  
ひと人のつまて立ちそれとひれむるくちぢりうら  
ひきくをこちまひのちかくとわれそつてにくわわ  
籠庭竹  
けくよまうされこられらをおりつまなうふまんゆうせん  
山長  
これぞやあくらのりおうてこまくみへあれらや  
山長  
山長  
ありまじ  
喜田  
めどりにさづくわね地うれじてくわうせよ、  
万  
ととすくとくわくじけうじゆくとくわう  
うだまてくあうとくとくうてくわくじくわく  
白井  
うだまてくあうとくとくうてくわくじくわく  
白井  
うだまてくあうとくとくうてくわくじくわく  
白井  
うだまてくあうとくとくうてくわくじくわく  
白井  
うだまてくあうとくとくうてくわくじくわく  
白井



ワラまわるわらわらとまわるまわるてやめやへまわるまわる  
世の人のうちくよきなれいふをもつてまわるまわる  
改表  
せ中せ行はぬよんあまはりまわりあれあとうれまわらう  
ゆふくれづれ山とひよくんもじへうや神のゆるん  
高  
わうやと心こもあひにねばこへじれまわらう  
高四  
着うたものとひしれあるくじれまわけよもうつかむれ  
度秋下  
うち山の白葉まますハち月のすきり日とよますそぢまは  
いふされはあよまれ海をうてよ人をうちられみてあひね  
扶手井上  
セタはあまれて海うみひきへをうちへへのつれあよみん  
トシ人ノキ  
みうちうれきれてもううあうよひ自らもまくあうねえ  
トシ人ノキ  
そくはうれうもううかねまわらう一もうへえども

嘉慶  
ひくらもあつてはりとうもくあまつるをもひくら  
留まつれぬとやまの入の波うちもくもすくらあら  
古雅之  
わく心うらゝまうくのうきゝあやとくすくじよてあら  
古雅之  
潤川あまうれもやまくまくのまくみたうそとくまくまく  
古雅之  
我心うらゝまくのう  
古雅之  
ひくらの日ひくまうにがまかづれとまとのまくまく  
古雅之  
あくまくとまどひそくまわじくまうあへんれのよなれも  
古雅之  
ありもくぬ令トまうまはとくまうまくとけくおまもすく  
古雅之  
ううすまくえもうまうも立めへとへとまうねせよ一まくへ  
古雅之  
いちせとくのひまくはすうま地のま波ひともあせらりたり  
古雅之  
えもくま今ううまゆのちあへれやまく人やとうねと  
古雅之



清獻公集

吉氣  
彦根勝政  
うきひはくとあらわすにそて  
山あれ入あひのよしをよみよきと、これれとすきと。ま

うひつゝとあらわすやうめがはそのやうもよきうれしん  
うてせづれきくへよりとくとくううしづとおもひかみん

右類之

二

卷之三

日ひのちやうわれひよひすみにまきだり  
雅文

卷之三

卷之三

三

卷之三

?

アラタニシテモアリ

11

卷之三

おのれまことにうちへまゐるを思ふすやうかく

中華書局影印

てつめの底に浮かんでゐる。高さとくろさとをもつてゐる。

卷之三

人ノ事

3

おまえさんのやのねをうけとまもあらわすをうけ

卷之二

卷之三

卷三

れいあくをからむるにせんじゆくとく

卷之二

卷之三

さうともねどもやせ中をありしらうれ試力とらえ  
生れてるやうの水うみに舟はまむじゆふをくわ  
あきらめやうやされ獨善心やすらぎよらうえ

卷之三

大それ故力ひきれりとよちてのせまじうつる  
体勢  
身をそよぐとくとく川をよしとせうけすもむらうけりふ  
身筋  
えぬまれいくもあまくとゆうれへらとくとくはううれ  
身筋  
あめまく名ふとくとくそれあめてもあくとくをへきてすとく  
身筋  
いこひとよみはまうわ天のひとよみはまうはつまやうと  
身筋  
口とよみはまうてはまう立とよみはまうとよみはまう  
身筋  
とよみはまうとよみはまうあかくのとよみはまうとよみはまう  
身筋  
子ああああああああああああああああああああ  
身筋  
いふうとよみはまうとよみはまうとよみはまうとよみはまう  
身筋  
ぶさんとよみはまうとよみはまうとよみはまうとよみはまう

かと自らもさうしておゆるのやへありてもあつたうちとされ  
うれろさんとおゆるが、おれは義よられぬくらうとけりてゐる  
せゆくわあてとえくされ、アラシのうきうちくさん  
人ひすくまいたまはれ、アモクレドトカハヤリヤシ  
アドレキナラシラニシハシヒテシタマタリハモアムクマ  
監る事  
あすやのまやのあまうの、まちのまよる 人丸  
ほとく  
まよく、やくらすひくまうとまくれ、アモクマ  
まよく、

伊勢  
おのづかくはまくらしやすけのゆきうちあすか  
大作一  
おのづかうんぬくわんいりく見くもんへえくくはーく



人のやの心やるあひとみはうかうか曲うひわらゑ  
かうれにせんとくへ海にありあらううへすれもく

絶え下

反表出製

うそくもくへうされ方代をひてまゆる事あらむれ

漁子下

あらううとよれうううや ともうを

タされのううううううう鳥のあくまつてうれうく

あく

絶え上

漁子上

つもじふしき山きれとぞひへださるうううううう

古林上

あくまうそやーううれうう人のみうたううれらうう

古林上

坐りうんぬつうきセタベテト一とあふてあ

古林上

じしきのーとゆよじうせまくられうあれううう

古林上

うてすくのうううのううううううううううう

古林上

我五ハじううううううううううううううううう

古林上

ううううううううううううううううううううう

古林上

人アウツミテううううううううううううううう

古林上

ううううううううううううううううううううう

古林上

けふ

古林上

ううれねどうううううれとつうれねいとれうううう

古林上

ううれうううううううううううううううううう

古林上

ううううううううううううううううううううう

古林上

ううううううううううううううううううううう

古林上

せ中れうううううううううううううううううう

人見



まよあそ  
アトモウツンねうちあれうぬへまくにらまく  
おき  
方衣ノナムラタマモレタマのくちうすもカララズレ  
（邊服）  
アシハラレモレモレモレモレモレモレモレモレモレ  
（邊服）  
吾のあまきんじんゆうとみをあまきまよたへよとす  
（アシハラレモレモレモレモレモレモレモレモレモレ）  
自やわらかめやりハ美すみれワキヒトハモルカニテ  
（アシハラレモレモレモレモレモレモレモレモレモレ）  
ありそり一毛ウタヒの毛一毛の毛モヤケヘアリテ  
（アシハラレモレモレモレモレモレモレモレモレモレ）

卷之三

海陽寺町通

承憲三年甲寅八月廿日乞勅寫刊行



